

CONCERT

2月~7月

コンサート、イベントから

EVENT

Opera バイエルン州立歌劇場 《南極》世界初演

「この人類の冒険物語は、オペラ上演史上の冒険でもある」と関係者も語るように、バイエルン州立歌劇場がチェコの作曲家ミロスラフ・スリンカに委嘱したオペラ、《南極》は非常にエキサイティングな体験となった。

20世紀初頭、同時に南極を目指したイギリス探検隊とノルウェー探検隊の実話を、オーストラリアの劇作家トム・ホロウェイが脚本化し、それを削りながら、音楽的に必要な部分のみ、音を付けていったのだという。

オーケストラ稽古では、舞台袖のバンダ、オーケストラ、台詞の際の拡声器、そして歌声と全てのバランスに心を砕くキリル・ベトレンコが、休憩中もスタッフたちと細部を詰めるなど、彼の周りにもみ緊張感が張りつめていたが、その努力が実り、本番で彼はこの新曲を完全に手中に収め、始まりの合図（キュー出し）すら優しさが漂うほどの余裕を見せていた。

ハンス・ノイエフェルスの演出は、雪を思わせる眩しいほどの白い舞台を二つに分け、ローランド・ピリヤソン演じるロバート・スコットを隊長とする英国

探検隊を左（下手側）に、トーマス・ハンブソン演じるロアルド・アムンセンが率いるノルウェー探検隊を右（上手側）に配置し、両隊のドラマが同時進行していくなか、必要最小限の舞台装置で南極を効果的に描いていた。

所見した2月3日は、初日の疲れが残ったようなピリヤソンの声が多少心配だったが、成功者アムンセンにふさわしい余裕のある歌唱を披露したハンブソン、探検家たちの幻想として現れる女性二人の、特にモイツァ・エルトマンの、超高音でも柔らかい声を保てるテクニックが光った。他、両探検隊員の一人ひとりが粒ぞろいでハイレベルな仕上がりとなっており、今後もレパートリーに残るであろう素晴らしい作品として、観客の胸に刻まれたに違いない。（中 東生）

